

原著論文

精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその要因  
に関する研究

Study on the positive experience and its relevant factors by students in practical psychiatric training

近藤浩子 阿達瞳 秋山美紀 林世津子

Hiroko KONDO, Hitomi ADACHI, Miki AKIYAMA, Setsuko HAYASHI



東京医療保健大学  
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

## 〈原著論文〉

# 精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその要因に関する研究

Study on the positive experience and its relevant factors by students in practical psychiatric training

近藤浩子 阿達 瞳 秋山美紀 林世津子

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Hiroko KONDO, Hitomi ADACHI, Miki AKIYAMA, Setsuko HAYASHI

Department of nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

**要 旨：**本研究の目的は、精神看護学実習における学生のポジティブ体験を明らかにすることであった。ポジティブ体験とは、喜びとともに未来への意義を感じられる体験である。看護学生80名が、無記名で質問紙に回答した。質問紙は8領域、計32項目で構成した。各8領域の質問は、実習全体の評価、患者の反応、学生自身のコミュニケーション、看護実践、指導者の承認・助言、教員の承認・助言、実習グループ、精神看護への関心、に関する内容とした。分析の結果、精神看護学実習におけるポジティブ体験の主要因は、教員の傾聴・承認・的確な助言で、次に学生自身のコミュニケーションが関連していた。学生は、困難状況を乗り越え、コミュニケーションのとり方がわかり、自分が成長し、患者がわかるようになったことを学びのあるよい体験と捉えていた。また実習中に自分らしく行動できたことが、精神看護を将来やってみたいという関心につながっていた。

**キーワード：**ポジティブ体験、精神看護学実習、看護学生

**Keywords：**positive experience, practical psychiatric training, nursing students

## I はじめに

ポジティブ体験とは、喜び、楽しさ、充実感といったポジティブな感情をともなう体験であり、かつ未来の自分にとっても意義があると感じられる体験をさす。すなわち今が楽しいといった快楽的な体験ではなく、今の楽しさは未来の喜びにもつながるという予測をもった至福型の体験である<sup>1)</sup>。

ポジティブ心理学の創始者セリグマンは、これまでの精神医療が患者の問題探求にエネルギーを注いで問題解決に至らなかったことを反省し、ポジティブ思考を精神科領域に取り入れる意義を説いている<sup>2)</sup>。幸せに生きている人は、よりよい人間関係を手にし、よりよく活動し、より健康な傾向があり、時おりネガティブな感情を体験しながらも、総合的には常にポジティブな心理状態を保っているという。

1990年代にわが国に導入され急速に広まったSST(ソーシャル・スキルズ・トレーニング)<sup>3)</sup>も、慢性精神障害者のよい点に着目し、それを伸ばすことによって障害を目立たなくしようとする考え方に基づいてい

る。SSTではポジティブ・フィードバックを重視するため、萎縮することなくコミュニケーション・トレーニングを受けられる。慢性精神障害者の強みを生かして、彼らの地域生活を再構築しようとするラップのストレングスモデル<sup>4)</sup>もこれに通じる考え方を持つ。

精神看護学実習においても、患者のポジティブな面に焦点をあて、強みを伸ばすという考え方をケアに取り入れることが非常に重要である。しかし看護場面には差し迫った問題のアセスメントが必要とされることもあり、このようなケアを行っていると患者の強みに着目するという観点が弱くなってしまうことがある。したがってポジティブ思考に基づいたケアを学ぶためには、まず学生自身がポジティブな体験をして、「喜びあって、得るものあり」と感じられるような実習を展開する必要があるのではないかと考える。

学生実習のポジティブな側面を扱った先行研究には、満足感や達成感に関するものがあった<sup>5-13)</sup>。それらは主に学生レポートや自由記載を資料としており、満足感や達成感の要因となった実習体験について指標を用いて詳細に分析した文献はなかった。先行研究には

患者理解やコミュニケーションなど患者との関わりができたこと、また看護実践、自己成長、教員や臨床指導者から評価、グループメンバーと協力などが、学生の満足感や達成感の要因になると述べられていた。これらの先行研究をもとに、本研究では質問紙を作成し、精神看護学実習における学生のポジティブ体験を明らかにするとともに、どのような実習体験がポジティブ体験に関連しているのかを追求することにした。

## 目 的

本研究は、精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその体験に関連する要因を明らかにし、その結果から教育上の示唆を得ることを目的とした。

## 方 法

### 1. 研究対象

A大学看護学科4年生で、3年後期から4年前期までの間に精神看護学実習を行った118名を対象とした。

### 2. 調査時期

3・4年次に配当されている看護学の臨地実習科目がすべて終了した4年次の8月とした。

### 3. 用語の操作上の定義

1) ポジティブ体験： ポジティブ心理学の創始者セリグマンの考えに基づき、本稿ではポジティブ体験を、「喜び、楽しさ、充実感といったポジティブな感情をともなう体験であり、かつ未来の自分にとっても意義があると感じられる体験」と定義した。ただしこれは今が楽しいといった快楽的な体験ではなく、今の楽しさは未来の喜びにもつながるという予測をもった至福型の体験を意味する。

2) ポジティブ評価： 上記とは別に、質問紙への回答において、ポジティブ体験ができたという肯定的回答のことをポジティブ評価とした。

### 4. 調査内容および方法

調査は、独自に作成した質問紙によって行った。

調査内容は、精神看護学実習における体験についての評価を質問するものとした（別紙参照）。質問項目の作成は、学生の満足感、達成感、学びに関して詳細に論述している看護学実習に関する論文を参考にして行った。論文内容から、学生が看護学実習でよかったと捉えた内容を文脈ごとに抽出し、そのうち精神看護学実習では体験できない内容を削除した後、内容の類

似性によって分類した。その結果、文献から抽出された内容は、受持ち患者の反応や状態に関する項目、自分自身の行動や考え方に関する項目、看護実践に関する項目、実習病棟・臨床指導者・教員・実習グループからの実習サポートに関する項目の4つに分類された。これとは別に「ポジティブ体験」の有無を問うために、実習全体をよい体験と捉えることができたかどうか、また実習体験に意義を感じられたかどうか（精神看護への関心）を問う項目を加えた。なお質問文の作成にあたっては、学生が精神看護学実習最終日に自由記載していた実習の感想を参照し、学生が使う表現にできるだけ近づける文体にした。以上の方法で、①実習全体、②受持ち患者、③自分自身、④看護実践、⑤実習病棟・臨床指導者・教員・実習グループ、⑥精神看護への関心の6領域に分類される計32項目を作成した。回答方法は「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の6段階の選択肢とし、所要時間は約10分であった。

調査方法は、対象学生が一堂に会す場で研究説明文を配布して説明し、回答は任意であることを伝えて質問紙を配布し、その場で回答してもらった。回答意志のある人には、期限付きで学内に設置した鍵付きのポストに投函してもらった。

### 5. データ分析

#### 1) 質問紙の得点化

質問紙への回答は、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の6段階を、6点から1点に点数化して分析した。なお全回答中に4カ所あった欠損値には、該当項目の平均値をあてて補った。データ分析には統計ソフトJMPを用いた。

#### 2) 領域別平均得点および領域間相関係数の算出

全32項目について項目間の相関係数を算出し、質問紙の作成時に暫定的に分類した6領域が妥当かどうかを検討した。その結果「⑤実習病棟・臨床指導者・教員・実習グループ」に含まれる10項目については項目間相関に3つの異なる傾向がみられたため、これを病棟と臨床指導者（4項目）、教員（3項目）、実習グループ（3項目）に3分割し、質問紙全体を8領域に分類した。

質問紙全体の信頼係数と各8領域の信頼係数を算出したのち、領域別平均得点と領域間の相関係数を求めた。領域別平均得点は、各領域の質問項目の合計得点を項目数で割って求めた。

#### 3) 項目毎の得点割合および項目間相関係数の算出

全32項目それぞれの得点割合を算出した。さらに全32項目のうち、実習全体の評価について質問した『領

域Ⅰ』の3項目および実習終了後の精神看護への関心について質問した『領域Ⅷ』の3項目の計6項目と、これら以外の『領域Ⅱ』から『領域Ⅶ』に含まれる計26項目との関連について、項目間の相関係数を算出して検討した。

## 6. 倫理的配慮

質問紙調査は無記名であった。研究協力の有無は本人の自由意志によって決められること、協力の有無は学習評価等に一切関係しないことを十分説明し、回答意志のある人に答えてもらうようにした。なお本研究は東京医療保健大学の倫理審査委員会の承認を経て実施した。

## 結 果

### 1. 精神看護学実習における体験のポジティブ評価

80名の学生から質問紙への回答を得た。回収率は67.8%であった。

#### 1) 質問紙の信頼性の検討（表1）

質問紙全体の信頼性を示すCronbach  $\alpha$  係数は0.94であった。また各8領域のCronbach  $\alpha$  は、領域Ⅰが0.76、領域Ⅱが0.80、領域Ⅲが0.82、領域Ⅳが0.86、領域Ⅴが0.93、領域Ⅵが0.97、領域Ⅶが0.88、領域Ⅷが0.93であった。Cronbach  $\alpha$  係数は0.8以上で信頼性が確保されるといわれており、本質問紙はおおむねこの基準を満たしていることから信頼性は確保された。

#### 2) 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価（表1）

領域別平均得点の得点範囲は1点から6点であった。8領域の名称には、質問紙の見出しを当てた。領域別平均得点は、実習全体について質問した『領域Ⅰ. 実

習全体』が4.66点、実習課題に関連する体験について質問した『領域Ⅱ. 受持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』が4.67、4.61、4.53点、臨床指導者・教員・学生からの実習サポートについて質問した『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』が5.37、5.35、5.18点であった。また精神看護学実習終了時点における実習後の精神看護への関心を質問した『領域Ⅷ. 精神看護への関心』が4.53点であった。

領域別平均得点は、3.5点が中立の値である。まず平均得点が5点代であった3領域、『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』については、図1（項目20から項目29）に示すように、主に「非常にそう思う、かなりそう思う」の範囲でポジティブ評価があった。また平均得点が4点代であった5領域、『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅱ. 受持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』については、図1（項目1から項目19、および項目30から項目32）に示すように、主に「かなりそう思う、ややそう思う」の範囲でポジティブ評価があった。なお『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の2領域は標準偏差が他の領域と比較して大きく、回答のばらつきが大きかった。

#### 3) 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関（表2）

『領域Ⅰ. 実習全体』のポジティブ評価と強い相関を示したのは、『領域Ⅲ. 学生自身』（ $r=0.62^{***}$ ）、『領域Ⅳ. 看護実践』（ $r=0.63^{***}$ ）、『領域Ⅵ. 教員』（ $r=0.63^{***}$ ）の3領域であった。これら3領域は、実習終了後の『領域Ⅷ. 精神看護への関心』とも相関が強かった。一方『領域Ⅰ. 実習全体』のポジティブ評価と弱い相関を示したのは『領域Ⅱ. 受持ち患者』（ $r=0.29^*$ ）、『領域

表1 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価（ $n=80$ ）

| 領 域                          | 平均得点 <sup>注)</sup> | 標準偏差 | $\alpha$ 信頼係数 |
|------------------------------|--------------------|------|---------------|
| I. 実習全体（3項目：No.1-3）          | 4.66               | 0.99 | 0.76          |
| II. 受け持ち患者（5項目：No.4-8）       | 4.67               | 0.83 | 0.80          |
| III. 学生自身（5項目：No.9-13）       | 4.61               | 0.72 | 0.82          |
| IV. 看護実践（6項目：No.14-19）       | 4.53               | 0.73 | 0.86          |
| V. 病棟と臨床指導者（4項目：No.20-23）    | 5.37               | 0.80 | 0.93          |
| VI. 教員（3項目：No.24-26）         | 5.35               | 1.07 | 0.97          |
| VII. 実習グループ（3項目：No.27-29）    | 5.18               | 0.85 | 0.88          |
| VIII. 精神看護への関心（3項目：No.30-32） | 4.53               | 1.17 | 0.93          |

注) 領域Ⅰ～Ⅷの得点範囲は1点から6点で、3.5点以上がポジティブ評価を示す



V. 病棟と臨床指導者』( $r=0.35^{**}$ )の2領域で、『領域Ⅶ. 実習グループ』は関連がみられなかった。つまり『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』『領域Ⅵ. 教員』の3領域が実習全体のポジティブ評価に主に関連し、これら3領域は実習終了後の精神看護への関心にも関連していたことが示された。

なお『領域Ⅰ. 実習全体』と『領域Ⅷ. 精神看護への関心』は、非常に強い相関( $r=0.70^{***}$ )を示していた。

#### 4) 精神看護学実習における体験のポジティブ評価の割合(図1)

実習体験に関するポジティブ評価の割合を、全32項目について詳細に検討した。

『領域Ⅰ:実習全体』の評価を構成する3項目「1.学びがあった」「2.楽に実習できた」「3.よい体験ができた」では、「非常に、かなりそう思う」という回答が約6割あった。

実習課題に関連した『領域Ⅱ:受持ち患者』『領域Ⅲ:学生自身』『項目Ⅳ:看護実践』を構成する16項目中、「非常に、かなりそう思う」という回答が6割以上あったのは4項目で、「6.患者との関係が進展した」「9.自分のコミュニケーション傾向がわかった」「16.患者に会うコミュニケーションがとれた」「19.精神看護の面白さを感じた」であった。反対に「非常に、かなりそう思う」という回答が4割前後と少なかったのは3項目で、「10.困難状況を乗り越えられた」「17.セルフケア援助ができた」「18.チームの一員だと感じた」であった。他の9項目、「4.患者が話してくれた」「5.患者に励まされた」「7.患者の状態が改善した」「8.患者の反応に変化があった」「11.コミュニケーションのとり方がわかった」「12.自分らしく行動できた」「13.自分が成長した」「14.患者のことがわかった」「15.必要な生活援助がわかった」は、「非常に、かなりそう思う」の回答が5割前後であった。

臨床指導者・教員・学生からの実習サポートを評価した『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』を構成する10項目では、「29.グループでストレス発散できた」以外の9項目において、「非常に、かなりそう思う」の回答が8割以上を占めていた。

実習終了後の精神看護への関心を問う『領域Ⅷ. 精神看護への関心』では、「30.精神看護の楽しさを伝えたい」「31.精神看護に興味を持った」の2項目において「非常に、かなりそう思う」の回答が6割以上あったが、「32.将来やりたい」については4割と少なかった。

#### 5) 精神看護学実習における体験のポジティブ評価に関する項目間の相関(表3)

実習全体のポジティブ評価および実習終了後の精神看護への関心は、実習中のどのような体験と関連するのかを知るために、『領域Ⅰ. 実習全体』および『領域Ⅷ. 精神看護への関心』に含まれる6項目と、『領域Ⅱ』『領域Ⅲ』『領域Ⅳ』『領域Ⅴ』『領域Ⅵ』『領域Ⅶ』に含まれる26項目との関連を検討した。

まず『領域Ⅰ. 実習全体』の構成項目である「1.学びがあった」「2.楽に実習できた」「3.よい体験ができた」の3項目すべてと0.4以上の相関があった項目は、「12.自分らしく行動できた」「19.精神看護の面白さを感じた」「24.教員が傾聴してくれた」「25.教員が承認してくれた」「26.教員は的確な助言をくれた」の5項目であった。また『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の構成項目である「30.楽しさを伝えたい」「31.興味を持った」「32.将来やりたい」の3項目すべてと0.4以上の相関があったのは上述の5項目に「13.自分が成長した」を加えた6項目であった。すなわち実習全体のポジティブ評価と実習終了後の精神看護への関心の双方に関連していたのは、自分らしく行動できたこと、精神看護の面白さを感じたことと、教員の傾聴・承認・的確な

表2 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関 (n=80)

| 領 域                                                | I. 実習全体  | II. 受持ち患者 | III. 学生自身 | IV. 看護実践 | V. 病棟と臨床指導者 | VI. 教員   | VII. 実習グループ | VIII. 精神看護への関心 |
|----------------------------------------------------|----------|-----------|-----------|----------|-------------|----------|-------------|----------------|
| I. 実習全体                                            | 1.00     |           |           |          |             |          |             |                |
| II. 受持ち患者                                          | 0.29 **  | 1.00      |           |          |             |          |             |                |
| III. 学生自身                                          | 0.62 *** | 0.51 ***  | 1.00      |          |             |          |             |                |
| IV. 看護実践                                           | 0.63 *** | 0.52 ***  | 0.72 ***  | 1.00     |             |          |             |                |
| V. 病棟と臨床指導者                                        | 0.35 **  | 0.18      | 0.48 ***  | 0.43 *** | 1.00        |          |             |                |
| VI. 教 員                                            | 0.63 *** | 0.08      | 0.53 ***  | 0.46 *** | 0.46 ***    | 1.00     |             |                |
| VII. 実習グループ                                        | 0.14     | 0.08      | 0.22      | 0.30 **  | 0.25 *      | 0.26 *   | 1.00        |                |
| VIII. 精神看護への関心                                     | 0.70 *** | 0.18      | 0.53 ***  | 0.57 *** | 0.36 ***    | 0.64 *** | 0.25 *      | 1.00           |
| * p<.05      * p<.05      ** p<.01      *** p<.001 |          |           |           |          |             |          |             |                |

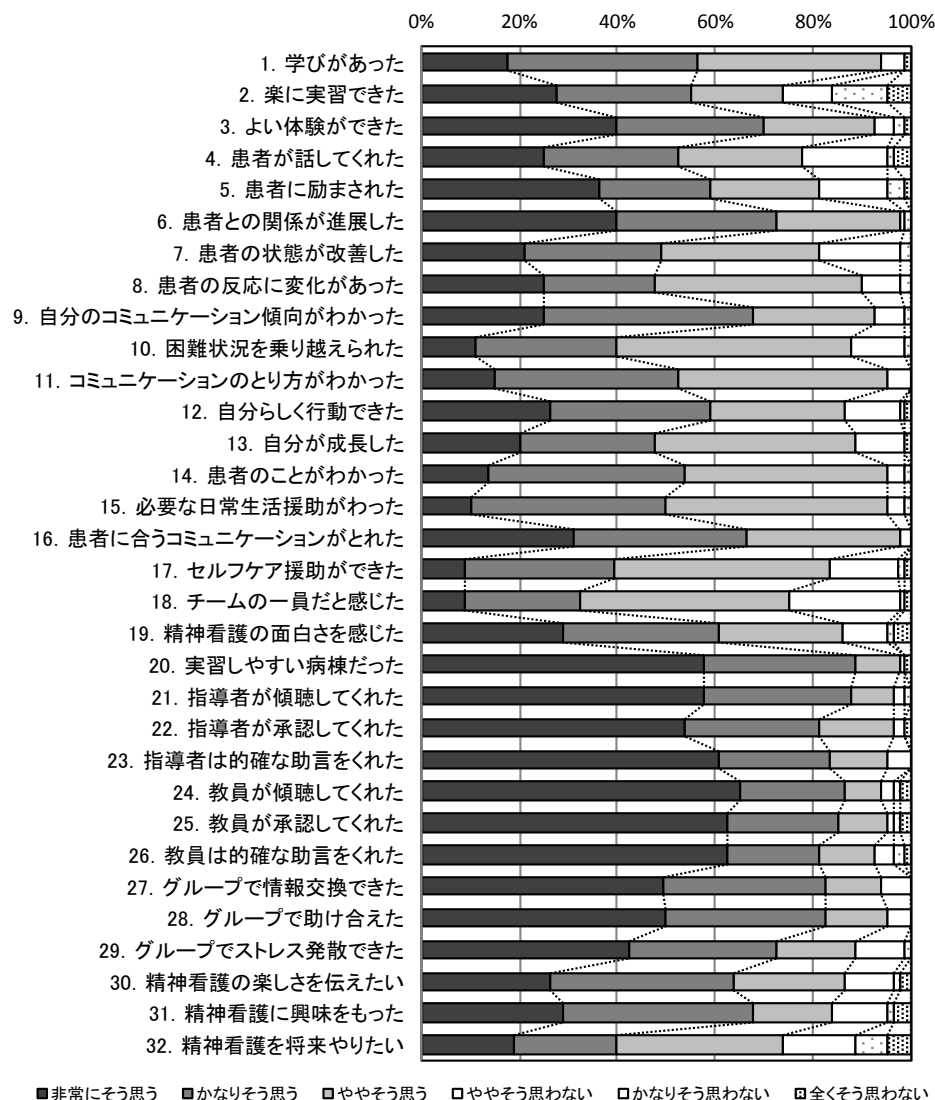


図1 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関 (n=80)

助言であった。なお『領域Ⅵ. 教員』の3項目は、『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の6項目すべてと0.5以上の相関があり、教員の傾聴・承認・的確な助言が、実習全体のポジティブ評価と精神看護への関心に強く影響していることが示された。

一方『領域Ⅰ. 実習全体』のうちの2項目「1. 学びがあった」「3. よい体験ができた」と0.4以上の相関があったのは、「10. 困難状況を乗り越えられた」「11. コミュニケーションのとり方がわかった」「13. 自分が成長した」「14. 患者のことがわかった」の4項目であった。一方「2. 楽に実習できた」「3. よい体験だった」の2項目と0.4以上の相関があったのは、「16. 患者に合うコミュニケーションがとれた」の1項目だった。この項目は「30. 楽しさを伝えたい」とも関連していた。このことから学生の実習に対するポジティブ評価は、関連する項目の違いによって、学びのあるよい体験と、楽で楽しいよい体験とに分かれることが示された。

次に『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の構成項目について0.4以上の相関があった項目を検討した。「30. 楽しさを伝えたい」は11項目と相関し、このうちの8項目が「30. 楽しさを伝えたい」「31. 興味を持った」の2項目とともに相関していた。さらにこのうちの6項目が「30. 楽しさを伝えたい」「31. 興味を持った」「32. 将来やりたい」の3項目すべてと相関しており、楽しさを感じた、興味を持った、将来やりたい、の順に相関する実習体験の項目数が少なくなっていた。つまり「32. 将来やりたい」は得点そのものも低かったが、関連する項目も少ないことが示された。

## 考 察

### 1. 精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその関連要因

ポジティブ体験とは、喜び、楽しさ、充実感といっ

たポジティブな感情をとまなう体験であり、かつ未来の自分にとっても意義があると感じられる体験である。よって精神看護学実習におけるポジティブ体験とは、学生が実習中によかったと感じただけでなく、将来においても意義があると感じた体験ということになる。ここでいう体験とは、自分が実際に経験したことだけでなく、個々の内で直接に感得される経験<sup>14)</sup>を含んでいる。

本研究では、まず『領域Ⅰ. 実習全体』で実習全体に対するポジティブ評価を問い、また『領域Ⅷ. 精神看護への関心』で実習後の精神看護への関心を問い、この双方に該当するものを精神看護学実習におけるポジティブ体験と捉えた。よってこの2領域とともに関連する『領域Ⅱ. 受け持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』の5領域の構成項目が、ポジティブ体験の関連要因ということになる。

まず『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅷ. 精神看護への関

心』を構成する6項目のうち「精神看護を将来やりたい」を除く5項目については、学生の約6割が「非常に、かなりそう思う」と回答していたことから、学生の約6割に精神看護学実習におけるポジティブ体験があったことが捉えられた。この2領域とともに相関が強かったのは『領域Ⅵ. 教員』であった。つまり教員の傾聴・承認・的確な助言が、精神看護学実習におけるポジティブ体験の主要な関連要因になっていたことが明らかになった。

教員や指導者の関わり方が学生実習の満足感・達成感に大きく影響することは、先行研究においても報告されている。教員や指導者の肯定的態度や承認は実習の満足感や達成の要因<sup>6) 13)</sup>になるだけでなく、学生の患者理解やコミュニケーションの深まり<sup>15)</sup>にも関連するという。またストレスフルな実習であっても、学生の自己効力感を高める支援があれば、より満足感の高い実習ができるという<sup>16) 17)</sup>。本研究の結果は、教員の傾聴・承認・的確な助言が精神看護学実習におけるポ

表3 精神看護学実習における体験のポジティブ評価に関する項目間の相関 (n=80)

| 領域          | 項目                     | Ⅰ. 実習全体        |                |                | Ⅷ. 精神看護への関心    |                |                |
|-------------|------------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
|             |                        | 1. 学びがあった      | 2. 案に実習できた     | 3. よい体験ができた    | 30. 楽しさを伝えたい   | 31. 興味を持った     | 32. 将来やりたい     |
| Ⅱ. 受け持ち患者   | 4. 患者が話してくれた           | -0.04          | 0.16           | -0.04          | -0.06          | -0.07          | 0.03           |
|             | 5. 患者に励まされた            | 0.08           | 0.16           | 0.23*          | 0.14           | 0.11           | 0.14           |
|             | 6. 患者との関係が進展した         | 0.13           | 0.15           | 0.26*          | 0.18           | 0.10           | 0.10           |
|             | 7. 患者の状態が改善した          | 0.30**         | 0.31**         | 0.39***        | 0.29**         | 0.28*          | 0.25*          |
|             | 8. 患者の反応に変化があった        | 0.21           | 0.16           | 0.29**         | 0.19           | 0.19           | 0.10           |
| Ⅲ. 学生自身     | 9. 自分のコミュニケーション傾向がわかった | 0.20           | 0.18           | 0.35**         | 0.12           | 0.15           | 0.09           |
|             | 10. 困難状況を乗り越えられた       | <b>0.47***</b> | 0.29**         | <b>0.53***</b> | <b>0.44***</b> | <b>0.40***</b> | 0.28*          |
|             | 11. コミュニケーションのとり方がわかった | <b>0.41***</b> | 0.34**         | <b>0.49***</b> | 0.34**         | 0.39***        | 0.25*          |
|             | 12. 自分らしく行動できた         | <b>0.41***</b> | <b>0.52***</b> | <b>0.60***</b> | <b>0.56***</b> | <b>0.52***</b> | <b>0.53***</b> |
|             | 13. 自分が成長した            | <b>0.45***</b> | 0.29**         | <b>0.56***</b> | <b>0.58***</b> | <b>0.50***</b> | <b>0.48***</b> |
| Ⅳ. 看護実践     | 14. 患者のことがわかった         | <b>0.46***</b> | 0.39***        | <b>0.54***</b> | <b>0.41***</b> | 0.39***        | 0.35**         |
|             | 15. 必要な日常生活援助がわった      | 0.29*          | 0.23*          | 0.33**         | 0.32**         | 0.24*          | 0.25*          |
|             | 16. 患者に合うコミュニケーションがとれた | 0.30**         | <b>0.40***</b> | <b>0.41***</b> | <b>0.42***</b> | 0.33**         | 0.30**         |
|             | 17. セルフケア援助ができた        | 0.29**         | 0.32**         | 0.34**         | 0.29**         | 0.20           | 0.24*          |
|             | 18. チームの一員だと感じた        | 0.37***        | 0.27*          | 0.35**         | 0.38***        | 0.31**         | 0.29**         |
|             | 19. 精神看護の面白さを感じた       | <b>0.63***</b> | <b>0.53***</b> | <b>0.76**</b>  | <b>0.80***</b> | <b>0.85***</b> | <b>0.73***</b> |
| Ⅴ. 病棟と臨床指導者 | 20. 実習しやすい病棟だった        | 0.15           | 0.26*          | 0.29**         | 0.32**         | 0.32**         | 0.19           |
|             | 21. 指導者が傾聴してくれた        | 0.23*          | 0.24*          | <b>0.42***</b> | <b>0.45***</b> | <b>0.42***</b> | 0.26*          |
|             | 22. 指導者が承認してくれた        | 0.26*          | 0.27*          | <b>0.43***</b> | <b>0.41***</b> | 0.39***        | 0.27*          |
|             | 23. 指導者は的確な助言をくれた      | 0.16           | 0.17           | 0.32**         | 0.30**         | 0.26*          | 0.16           |
| Ⅵ. 教員       | 24. 教員が傾聴してくれた         | <b>0.41***</b> | <b>0.51***</b> | <b>0.62***</b> | <b>0.60***</b> | <b>0.62***</b> | <b>0.51***</b> |
|             | 25. 教員が承認してくれた         | <b>0.44***</b> | <b>0.50***</b> | <b>0.64***</b> | <b>0.62***</b> | <b>0.63***</b> | <b>0.53***</b> |
|             | 26. 教員は的確な助言をくれた       | <b>0.45***</b> | <b>0.45***</b> | <b>0.63***</b> | <b>0.61***</b> | <b>0.63***</b> | <b>0.53***</b> |
| Ⅶ. 実習グループ   | 27. グループで情報交換できた       | 0.13           | 0.07           | 0.23*          | 0.28*          | 0.23*          | 0.23*          |
|             | 28. グループで助け合えた         | 0.12           | 0.05           | 0.18           | 0.23*          | 0.17           | 0.17           |
|             | 29. グループでストレス発散できた     | 0.05           | 0.06           | 0.13           | 0.26*          | 0.16           | 0.21           |

注)0.4以上の相関係数は、太字の斜体で示した

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

ジティブ体験の有無に影響する主要な関連要因になることを数値で裏づけたといえる。

ところで傾聴・承認・的確な助言は臨床指導者からも約8割の学生が得ていた。しかしながら本結果では、教員からの傾聴・承認・的確な助言のみがポジティブ体験として捉えられた。その理由としては、本学の実習が学生4人に教員1人という濃密な指導を2週間継続して行なう形態であるため、日々交代する臨床指導者に比べて教員の影響力が強く出たのではないかということが推測できる。この影響力は別の意味で、教員が学生をどうサポートするかによって、学生実習がポジティブ体験にも、ネガティブ体験にもなり得る可能性があることを示唆する。本結果においても『領域Ⅳ：教員』についての評価は、他に比べてばらつきが大きかったことから、教員は自らの学生に対する影響力を自覚し、学生が実習体験のポジティブな面を認識できるよう意識的に関わる必要があると考える。

## 2. 学生にとって学びがあったこと、楽に実習できたこと、よかった体験

『領域Ⅵ：教員』に次いで、『領域Ⅰ：実習全体』『領域Ⅷ：精神看護への関心』の2領域と強い相関があったのは、『領域Ⅲ：学生自身』と『領域Ⅳ：看護実践』であった。これらの関連を項目間の相関でみると、一部の項目間の相関が強かったことが示された。

まず『領域Ⅰ：実習全体』の構成項目のうち、「学び」と「よい体験」に関連していた体験は、困難状況乗り越えたこと、コミュニケーションのとり方がわかったこと、自分が成長したこと、患者がわかるようになったことであった。「学び」と「よい体験」の2項目は、それぞれ達成感・満足感を意図した項目だった。よってこれらの体験は、学生にとって達成感や満足感を得た体験であったと推測できる。しかしこれら4項目は「非常に、かなりそう思う」の割合が4割から5割であり、得点そのものは高くなかった。精神看護学実習の達成度に関する先行研究には、患者－看護者関係、および自己理解については学生の自己評価が70%と高かったのに対し、患者理解は50%、看護過程の展開は40%と低かったという報告がある<sup>8)</sup>。また看護過程の展開がうまくできなかったことを、実習が不満足だった要因としてあげた学生が多かったという報告もあった<sup>9)</sup>。本研究とは項目設定が異なるので簡単な比較はできないが、看護実践に関連する達成度が低いという傾向は両者に共通していると考えられる。

精神看護の臨床においては、患者理解や患者との関係形成が不十分な状況で看護過程を展開してケアを行ったとしても、そのケアが患者にとって適切なものにな

るとは言い難い。患者の権利が尊重される臨床の場では、学生が看護実践を経験できる機会も限られてきている。このような現状を踏まえると、臨地実習では看護過程の展開に焦点を当てるより、学生だからこそできる患者との関わりを大事にし、学生が患者と関係形成する力、コミュニケーションをとる力を育て、患者理解を中心とした実習を行っていくことのほうが有用ではないかと考える。

次に、『領域Ⅰ：実習全体』の構成項目のうち、「楽に」と「よい体験」の2項目と関連していたのは、「患者に合うコミュニケーションがとれた」であった。「楽に」の項目は他に「自分らしく行動できた」とも関連していた。今回、質問紙に「楽に」という項目を取り入れた意図は、学生が実習を「楽」ととらえるか「苦痛」ととらえるのかは、何によって異なるのかを明らかにするためであった。本結果から、楽に実習できたかどうかは、患者とコミュニケーションが取れ、自分らしく行動できたかどうかと関連していたことが示された。ただし「楽」という回答は5割程度で『領域Ⅰ：実習全体』の他項目のポジティブ評価と比べて少なく、かつ「そう思わない」という回答が約2割と全32項目中で最も多くなっていた。よって精神看護学実習は必ずしも楽とは言えず、患者とコミュニケーションがとれるかどうかということが学生にとってのプレッシャーになっていたことが推測できる。

先行研究<sup>5)</sup>では、精神看護学実習において学生の約65%が、患者との対応の困難さや援助の拒否にともなう不安や戸惑いといったマイナス感情を経験したことを報告していた。しかしマイナス感情は、実習終了後の精神看護に対するよいイメージとも関連していたことから、指導者や教員の支えによって克服されれば学びにつながるものでもあると述べられていた。実際、実習の場で患者とのコミュニケーションがうまくいっていない学生は、自分らしく行動できなくなっていることが多い。そのような際に、学生がマイナス感情を表現できるように教員が支持し、学生が自分の内にこもることなく、患者の気持ちやコミュニケーションのとり方に目を向けられるように促すことが、重要なアプローチであることが示唆されたと考える。

## 3. 精神看護への関心につながるポジティブ体験

精神看護分野への就職意欲と学生の実習体験はどのように関連しているのかということは、看護の教育者にとっての関心事である。中川<sup>18)</sup>らによれば、精神看護分野への興味に影響するのは、実習体験について単によいイメージや肯定的感情をもつだけでなく、さまざまな体験について多角的な捉え方ができるようにな



ることであるという。

本研究において、「精神看護を将来やりたい」ということと関連していたのは、教員の関わりに関するものを除くと、自分らしく行動できたこと、自分が成長したこと、精神看護の面白さを感じたことであった。この「自分らしく行動できた」というポジティブ体験は、患者と自然なコミュニケーションができたことを意味しているのではないかと推測できる。たとえば精神看護学実習の場で学生は、今までに経験したことのないような患者とのコミュニケーションを体験する。ポジティブな反応もネガティブな反応も率直に返してくる患者に対して、学生はどう受け止めたらいいかと戸惑い、必要以上に気遣ったり、身構えたりと不自然な対応をしてしまう。容易なことではないが、学生が自らの構えに気づいて、自然体のままで応答できるようになると、患者からも受け入れられるようになることが多い。よって「自分らしく行動できた」という背景には、そこに至るまでに患者との関わりの中で、学生にとって自己成長につながるような何らかの貴重なやり取りがあったのではないかと考えられる。このようなポジティブ体験が、精神看護を将来やりたいという展望につながったのではないだろうか。

看護は、一般論やパターン化された技能の通用しない、今ここにおける一回性と創造性の中で「生命と向き合う」という本質をもつ<sup>19)</sup>。こうした一回性の体験の中にある臨床の知を伝え、看護の文化を伝承することが看護教育である。精神看護学実習におけるポジティブ体験には、患者とのかかわりの中で、学生が臨床の知に通じる何らかの気づきを得た瞬間が含まれているのではないかと考えている。学生の混沌とした体験の中から臨床の知を導き、真の意味で人と関わる人を育てていくためには、学生のポジティブ体験を敏感に察知する感性と、その言語化を促す力が教員に求められると考える。

## 結 論

1. 精神看護学実習においてポジティブ体験があったと回答した学生は、全体の約6割であった。その体験の主な要因は、教員の傾聴・承認・的確な助言であった。
2. 精神看護学実習において学生が「学びのあるよい体験だった」と捉えていたのは、困難状況を乗り越えたこと、コミュニケーションのとり方がわかったこと、自分が成長したこと、患者のことがわかるようになったことであった。
3. 実習の中で「自分らしく行動できた」というポジ

ティブ体験が、精神看護を将来やってみたいという学生の関心につながっていた。

## 文 献

- 1) Tal Ben-Shahar. HAPPIER — Can you learn to be happy. England. McGraw-Hill Publishing Company. 2007.
- 2) Martin E.P. Seligman. Authentic Happiness — Using the new positive psychology to realize your potential for lasting fulfillment. NY. Free press. 2002.
- 3) R. P. Liberman, W. J. DeRisi, K. T. Mueser. Social skills training for psychiatric patients. Pergamon press, Inc. 1993.
- 4) Charles A. Rapp, Richard J. Goscha. The strengths model, Case management with people with psychiatric disabilities, 2nd edn. Oxford University press 2006.
- 5) 大澤亜貴子, 松岡晴香, 浅沼奈美. 精神看護学実習における学生の学びと精神看護分野への職業選択との関連. 杏林大学研究報告教養部門 2011 ; 28 : 25-34.
- 6) 原田秀子. 臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析 (第3報), 4年次学生に対しての縦断調査を通して. 山口県立大学看護学部紀要 2006 ; 10 : 29-37.
- 7) 百々晃代, 富樫和代, 東谷みゆき他. 精神看護学実習における学生の満足感の要因, 実習終了後の学生の記述から. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要 2010 ; 6 : 47-50.
- 8) 田中敦, 関口佳宏, 古軸弘恵. 精神看護実習における学生の実習満足感と学習課題達成度, A病院で実習を終えた学生の調査. 日本看護学会論文集看護教育 2010 ; 40 : 245-247.
- 9) 片山由美, 奥津文子, 大矢千鶴. 臨地実習において学生が満足・不満足であるとした場面の検討, 臨地実習指導の在り方の一考察. 京都大学医療技術短期大学部紀要 2002 ; 22 : 53-65.
- 10) 片山由美, 奥津文子. 臨地実習目標達成度評価と実習満足度の関連, 学生の満足度を取り入れた臨地実習目標達成度評価の一考察. 京都大学医療技術短期大学部紀要 2003 ; 23 : 33-42.
- 11) 岩脇陽子, 滝下幸栄. 学士課程の基礎看護実習における実習目標に関連する要因. 京都府立医科大学看護学科紀要 2005 ; 14 : 11-19.
- 12) 神谷美樹, 高杳裕子, 小原まゆみ他. 母性看護学実習において看護学生が感じる満足度・達成感の分析. 九州国立看護教育紀要 2008 ; 10 <sup>(1)</sup> : 8-15.

- 13) 陰山淑江. 成人看護学実習(急性期)を通して得られる達成感・満足感の要因. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2007; 32: 70-77.
- 14) 村松明編. 体験. 大辞林 第三版. 三省堂. 2006:1502.
- 15) 内山繁樹. 学生による精神看護学の臨地実習評価, 新カリキュラムの実習分析と今後の課題. 神奈川県立看護教育大学紀要 2002; 24: 73-80.
- 16) 中村博文, 渡辺尚子. 精神看護学実習の学びにおける自己効力感・自尊感情・健康統制感との関連. 日本看護学会論文集看護教育 2011; 41: 232-235.
- 17) 奥津文子, 片山由美, 大矢千鶴他. 効果的な臨地実習指導法の検討, 学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察. 京都大学医療技術短期大学部紀要 2002; 22: 33-41.
- 18) 中川幸子, 鈴木啓子, 永井優子他. 看護学生 of 精神科領域への就業意欲に関する諸要因の検討, 一文章完成法による分析一. 千葉大学看護学部紀要 1994; 16: 101-105.
- 19) 藤岡寛治, 「臨床の知」を教えるということ, 藤岡寛治, 屋宜譜美子編. 看護教員と臨地実習指導者. 東京. 医学書院. 2004; 136-137.

精神看護学実習におけるポジティブ体験についてのアンケート

別紙

精神看護学実習を思い起こし、下の項目に示すような体験があったかどうかをお答えください。覚えている範囲で構いません。回答方法は、右の回答欄のあてはまる所に○をつけてください。

|                                        | 回答欄                  |                      |                     |                       |                        |                       |
|----------------------------------------|----------------------|----------------------|---------------------|-----------------------|------------------------|-----------------------|
|                                        | 非常に<br>そう<br>思う<br>6 | かなり<br>そう<br>思う<br>5 | やや<br>そう<br>思う<br>4 | やや<br>そう思<br>わない<br>3 | かなり<br>そう思<br>わない<br>2 | 全く<br>そう思<br>わない<br>1 |
| <b>実習全体について</b>                        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 1. 精神看護学実習では、学びたいことが学べた                |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 2. 精神看護学実習は、(精神的・身体的に)楽に実習することができた     |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 3. 全体的にみて精神看護学実習では、よい体験ができた            |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| <b>受持ち患者について</b>                       |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 4. 患者は学生に対して、色々な話(入院生活・病気のこと)をしてくれた    |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 5. 患者は学生に対して、励ましや感謝の言葉をくれた             |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 6. 患者と学生との関係は、実習中、少しずつ進展していった          |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 7. 患者の状態は、実習中、よい方向に向いていった              |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 8. 学生の関わり(看護)によって、患者の反応に変化がみられた        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| <b>自分自身について</b>                        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 9. 自分のコミュニケーションの傾向がわかるようになった           |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 10. 患者との関係づくりが困難な状況を、乗り越えられるようになった     |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 11. 患者とのコミュニケーションのとり方がわかるようになった        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 12. 自分らしく行動することができた                    |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 13. 自分が成長した(今までできなかったことができるようになった)と感じた |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| <b>看護実践について</b>                        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 14. 患者のこと(病状、行動のしかた、気持ち)がわかるようになった     |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 15. 患者にどのような日常生活援助が必要か、わかるようになった       |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 16. 患者にあう方法で、コミュニケーションがとれるようになった       |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 17. 患者のセルフケアを高める援助ができるようになった           |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 18. チームの一員として看護している感じが持てるようになった        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 19. 精神看護の面白さを感じられるようになった               |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| <b>実習病棟・臨床指導者・教員・実習グループについて</b>        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 19. 実習しやすい病棟だと感じた                      |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 20. 臨床指導者は、学生の話をよく聞いてくれた               |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 21. 臨床指導者は、学生のよいところを認めてくれた             |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 22. 臨床指導者は、学生に的確な助言をくれた                |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 23. 教員は、学生の話をよく聞いてくれた                  |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 24. 教員は、学生のよいところを認めてくれた                |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 25. 教員は、学生に的確な助言をくれた                   |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 26. グループメンバーとは、たがいに情報交換ができた            |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 27. グループメンバーとは、たがいに助け合うことができた          |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 28. グループメンバーとは、たがいにストレスを発散しあえた         |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| <b>精神看護への関心</b>                        |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 29. 精神看護学実習の楽しさを人に伝えたいと思った             |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 31. 精神看護について興味をもった                     |                      |                      |                     |                       |                        |                       |
| 32. 将来、精神看護をやってみたいと思った                 |                      |                      |                     |                       |                        |                       |

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

**Summary**

**A I M S** : A questionnaire survey was conducted to clarify students' positive experience in psychiatric practical training. The positive experience is the experience in which students can find pleasure and meaning for the future.

**METHODS** : 80 nursing students who completed all practical training anonymously replied to the questionnaire. It consisted of eight domains with a total of 32 items. "Domain I: Total Experience" included questions on sense of accomplishment and satisfaction with whole of the training. "Domain II: Patients" included questions on patients' reaction to students as well as behavioral changes in patients. "Domain III: Student's Self" included questions on students' awareness to communication as well as overcoming of difficult situations. "Domain VI: Nursing Practice" included questions on care provided by students. Similarly, "Domain V: Ward and Bedside training instructor" included questions on recognition and advice from ward nurses, "Domain VI: Teachers" included questions on recognition and advice from teachers, "Domain VII: Training Group" included mutual support among students, and "Domain VIII: Interest in Psychiatric nursing" included students' application for psychiatric nursing in their future. Data was analyzed by obtaining correlation coefficient among domains and among items or drawing band graph of each item.

**RESULTS** : Cronbach's  $\alpha$  was 0.94 in the case of the overall questionnaire and 0.76-0.97 in the case of each of the eight domains. Three domains of "Domain III: Student's Self", "Domain IV: Nursing Practice" and "Domain VI: Teachers" were highly correlated with both of "Domain I: Total Experience" and "Domain VIII: Interest in Psychiatric nursing" which shows the positive experience by students in practical psychiatric training.

**CONCLUSIONS** : It was suggested that about 60% students had positive experience in psychiatric practical training, and it was mainly related to intent listening, recognition and suitable advice from teachers. For students, the good experience with learning was that they could overcome difficult situations, they have learned how to communicate with the patient, they have developed and they could understand the patient. Also the students' concern that they want to be psychiatric nurses in the future was connected with having acted truly to themselves during training.